



# 海と湖に挟まれた伝統行事息づく漁村 日向、早瀬

美浜町日向、早瀬

日向水中綱引きからは海の男の心意気、早瀬の子供歌舞伎からは北前船の繁栄ぶりが、若狭湾に面した風光明媚な漁村からは、古きよき港の喧噪の名残を思い起こさせる。



水中綱引き（国選択無形民俗文化財）

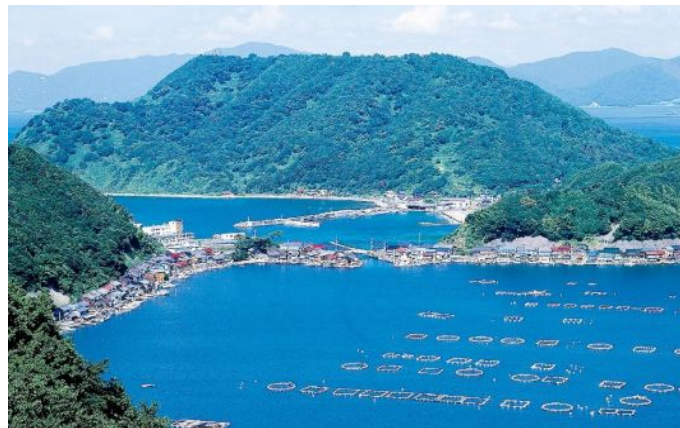
若狭湾とつながる日向湖の湖畔に位置する日向地区には、若狭湾の波の荒々しさと、日向湖の湖面の穏やかさに挟まれた、天然の純漁村が広がっています。

毎年1月には、色とりどりの大漁旗が張り渡された中、約360年前から守り継がれた水中綱引きが行われます。



日向漁港

直径30cm、長さ40cmのわら綱が日向湖と若狭湾をつなぐ運河に渡され、村の青年達が威勢のいい掛け声とともに東西に分かれて引き合います。冬の肌を刺すような冷たい水の中で繰り広げられる迫力満点の水中綱引きからは、海の男の心意気を感じます。



梅丈岳から日向を望む①



岳山から早瀬を望む②

若狭湾と久々子湖に挟まれた風光明媚な湖口付近、岳山の南麓に位置する早瀬地区は、漁業のほか北前船の寄港地となるなど水産物の集散地として栄えた港町です。

早瀬地区では、毎年5月5日、日吉神社例大祭に社前をはじめとする区内各地を巡幸する山車の舞台で、子供歌舞伎が上演されます。

華やかな子供歌舞伎からは、商家や旅館が立ち並ぶ港町として繁栄してきた早瀬の姿を感じることができます。



子供歌舞伎（町民俗文化財）③



写真①～③は美浜町提供





# 山頂から望む絶景 みかたごこ 三方五湖

美浜町、若狭町

山頂から五色の湖を望むと、万葉の歌人が味わったものと同じ感動に満たされ、湖畔に佇めば、遠くに水面をたたく音が聞こえ、古来からこの湖に育まれてきた営みを感じる。



はいしょうだけ  
梅丈岳山頂から三方五湖（国名勝）を望む

雄大な自然が創り出した若狭の水郷「三方五湖」は、若狭湾国定公園を代表する景勝地であり、万葉集にも歌われているなど いにしえ古の時代から広く知られた、四季折々の美しさを持つ優雅な湖です。



かわらけ投げ<sup>①</sup>

三方五湖は、低いゆるやかな丘陵性の山々に囲まれ、温和さと素朴さにあふれた自然美を形成しています。

レインボーラインを通り、標高約 400mの梅丈岳山頂に登ると、水質や水深の違いから濃さの違う青色に見える五色の湖が広がり、素焼きの皿に願い事を書いて、湖の方向へ空高く投げる「かわらけ投げ」の光景が見られます。



湖面を走るレイクルーズ<sup>②</sup>



たたき網漁<sup>③</sup>

山々が赤や黄色の鮮やかな秋の気配に染まると、三方五湖では江戸初期から伝わるといわれている伝統的な漁法「たたき網漁」が始まり、水面を竹竿でたたく音が響きます。



梅丈岳山頂にある誓いの鍵<sup>④</sup>



すいげつこ水月湖とくくしこ久々子湖をつなぐうらみがわ浦見川<sup>⑤</sup>







# 天狗が踊る 王の舞

美浜町宮代、若狭町気山など

神社では、天狗の面をつけた勇壮な踊りが執り行われている。笛や太鼓の雑子の音色を聞くと、人々は若狭に春がやってきたことを実感する。



弥美神社で奉納される王の舞（県民俗文化財）<sup>①</sup>



弥美神社

美浜町宮代地区の東、御岳山の西山麓に位置する弥美神社では、毎年5月1日の祭礼において、王の舞が奉納されます。

王の舞は宮廷などで行われる舞楽の系統に属するものといわれ、若狭地方を中心に数々の神社で奉納されてきたものです。



弥美神社で奉納される王の舞（県民俗文化財）<sup>②</sup>



宇波西神社で奉納される王の舞（国選択無形民俗文化財）<sup>③</sup>



間見神社で奉納される王の舞（県民俗文化財）<sup>④</sup>



多由比神社で奉納される王の舞（県民俗文化財）<sup>⑤</sup>



写真①～②は美浜町、③～⑤は若狭町提供





# 神宿る半島 若狭常神

若狭町常神、神子など

塩坂越トンネルを抜けると海が見えた。さあ、ここからが常神半島の始まりだ。豊かな自然とのどかな風景を楽しみながら、30分後には御神島が目前に現れる。



常神半島先端と御神島（若狭町神子からの眺望）



干物づくりの風景①

若狭湾国立公園の見どころのひとつ常神半島は、特に海水の透明度が高く、海中景観が優れていることから、海域公園地区に指定されています。

常神半島の島の名前は神功皇后を祀る常神社に由来するといわれ、また半島から500m西には無人島の御神島があり、かつてこの島には神が住んでいて、様々な厄災から人々を守ってきたといわれています。



常神半島神子区で見られる山桜（県名勝）②

常神半島はその地理的条件から人の手があまり入っておらず、壊されずに残っている自然景観や古くからの生業としての漁業風景などが見られます。神子区に山頂から海に向かって一斉に咲く山桜はその代表で、最盛期には半島が薄紅色に染まり、海の青とのコントラストを楽しむことができます。また、常神半島の気候が育んだソテツは、日本最北限のソテツとして国の天然記念物となっています。



大敷網漁の様子③



わかめの選別作業④



日本最北限のソテツ(国天然記念物)  
(若狭町常神) ⑤







## 湖畔に佇む 茅葺きの舟小屋

若狭町田井など

里歌にも「沖に見ゆるは霞か雲か あれは西田の梅の花」と歌われる。梅の花は可憐なイメージだが、7万本もあると話は別だ。この辺り一帯は一面白に染まり、三方湖の水面と舟小屋を含め、華麗な風景が目を見舞う。その後の梅の実は収穫、天日干しも…



農作業に使われている舟小屋（若狭町田井）①

福井県は日本海側最大級の梅の産地であり、「福井梅」は肉厚で種が小さく高品質であることから、皇室に献上されたり、大相撲の優勝力士にも贈られています。なかでもこの若狭



梅の天日干し

町三方地域は県内の半数以上の梅農家が集まる県内一の梅の産地で、三方五湖湖畔には約7万本の梅林が広がっています。梅の実は6月頃に収穫され、8月頃に天日干しが行われます。

また、湖沿いに残っている茅葺きの舟小屋は、向かいの梅畑や水田での農作業に用いる小舟を格納するためのもので、県内でも珍しい景観です。

「福井梅」の栽培の歴史は古く、江戸時代の天保年間（1830～1844年頃）に若狭町田井で初めて栽培された



梅林と三方五湖を望む（若狭町成出）②



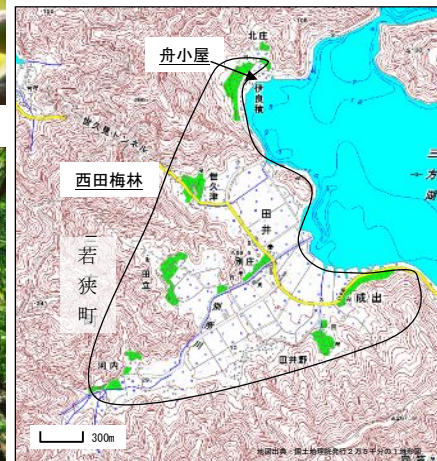
たわわに実る梅の実

とされています。明治時代に様々な品種改良が行われ、現在の梅干し用の「紅映」と梅酒用の「剣先」が生まれました。

春先にはほのかな桃色を帯びた梅の花が湖畔一面に咲き誇り、華麗な風景に圧倒されます。



梅の収穫の風景







# 真夏の冷水 名水百選 うりわり 瓜割の滝

てんとくじ  
若狭町天徳寺

本当に瓜が割れるのだろうか、そんなことを考えたこともあったが、何しろ夏は気持ちいい。マイナスイオンをいっぱい浴びて、水を汲んで帰ろう。この水は家族みんなの評判がいいから・・・



うりわり  
瓜割の滝の荘厳な流れ（若狭町天徳寺）



紅葉の頃の瓜割の滝①

若狭町の<sup>てんとくじ</sup>天徳寺境内奥に位置する「<sup>うりわり</sup>瓜割の滝」は、山あいの岩間から湧き出る清泉で、一年を通して水温が変わらず、水につけておいた瓜が割れるほど冷たいことから、その名前がつけられました。天徳寺の開基<sup>たいちよう</sup>泰澄大師の昔（約1300年前）から神泉と尊ばれ、<sup>ごこくせいじゆくやまいたいさん</sup>五穀成熟病退散の靈験ありと信じられてきました。滝周辺は元々「水の森」と呼ばれ、修験者の修行地であり、朝廷の雨乞いを司るところであったといわれています。

瓜割の滝から湧き出る瓜割の水は、長い歳月をかけてろ過した純度の高いミネラル成分が溶け込んでおり、環境省の名水百選にも選ばれています。また、水中の赤い石には、この水質水温でのみ生育する、めずらしい<sup>こうそうるい</sup>紅藻類（ヒルデンプリンチアブラリス）が繁殖しています。



てんとくじ  
天徳寺の八十八体の石仏（若狭町天徳寺）②



若狭瓜割名水公園（若狭町天徳寺）③

瓜割の滝のふもとには若狭瓜割名水公園が整備され、名水を提供するための水汲み場が設けられるなど、交流の場となっています。上流では瓜割の滝の厳かな景観、下流では名水公園のほのぼのとした景観が楽しめます。

また、天徳寺には弘法大師が四国八十八ヶ所を模した霊場を開くために、佐渡の石工に刻ませたと伝えられる八十八体もの石仏があります。冬には<sup>わらわ</sup>藁の頭巾をかぶり、独特の雰囲気を感じ出します。



名水に触れる人々







# 若狭から京へ続く鯖街道 熊川宿

くまがわ おぼまいまみや  
若狭町熊川、小浜市小浜今宮など

国道303号からこの熊川宿に一步入ると、そこは若狭街道の宿場であった江戸時代の様相。少しずつ当時の情景に近づいていく町並みを歩くたびにその魅力は増していく。



重要伝統的建造物群保存地区 熊川宿 (若狭町熊川)



熊川宿を流れる前川のせせらぎ①

福井県小浜市から京都の出町柳を結ぶ「若狭街道」は、主に鯖などの魚介類を運ぶことが多かったことから、いつ頃からか「鯖街道」と呼ばれるようになりました。「鯖街道」の道中にあたる若狭町には、宿場町として発展した熊川宿があります。



鯖街道の起点 (小浜市小浜今宮のいつみ町商店街) ②



雪の熊川宿③



紅葉の頃の松木神社 (若狭町熊川) ⑤



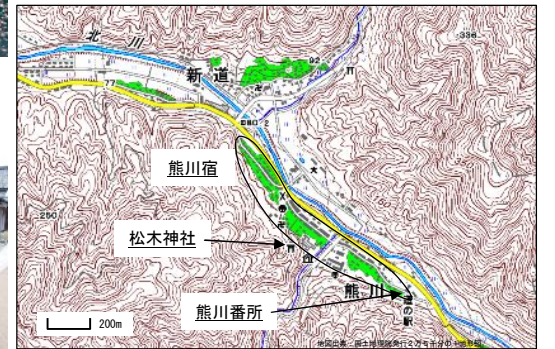
熊川番所

「熊川宿」は交通と軍事において重要な場所であることから、若狭の領主であった浅野長政が、天正17年(1589年)に諸役免除して宿場町としました。昔の町家が約1.1kmの道の両側に建ち並び、当時の賑わいが思い起こされます。毎年10月には「熊川いっぶく時代村」と題して、熊川宿の町並みを活かした当時の雰囲気を感じられるイベントが開催され、多くの人々が訪れます。近江との国境には往来手形を改める熊川番所がありました。現在の番所は平成15年に復元整備したもので、全国でも貴重な建造物となっています。

また、地区内にある松木神社は江戸時代初期、過酷な年貢の取立てに立ち向かい、命と引き換えに悲願を成し遂げた若狭の義民・松木庄左衛門を祀る神社で、桜と紅葉が美しく住民の憩いの場となっています。



熊川いっぶく時代村④







# 荒波の彫刻 蘇洞門

小浜市宇久、田鳥 など

蟹のはさみの様な左右ふたつの半島に囲まれた小浜湾は、波穏やかでかきの養殖が盛んだというが、湾外に出たら別の表情になる。蘇洞門の絶景は、日本海の荒波の芸術を肌で感じさせてくれる。



蘇洞門（国名勝）の大門、小門①



若狭湾と田鳥の棚田（小浜市田鳥）



かきの養殖

小浜市は、外海の若狭湾と内海の小浜湾に面しています。外海の若狭湾は日本海側では珍しいリアス式海岸で、たいへん波が強く、沖の内外海半島の先端には、永い年月をかけて波によって削られた「蘇洞門」と呼ばれる6 kmにわたる大きな奇岩・洞窟などが見られます。

内海の小浜湾は一転して波穏やかで、かきの養殖などの漁業風景が見られます。



小浜湾と小浜の町並み②



人魚の像（マーメイドテラス）

海のある奈良と呼ばれる小浜のまちは、静かな小浜湾の風景に溶け込み、日が沈む前には、海岸沿いの人魚の像が赤く照らされ、絵のような光景が広がります。

また、沖の方にはナタオレノキなどの珍しい植物がある「蒼島」が浮かび、国の天然記念物に指定されています。



蒼島（国天然記念物）







# 豊富な海産物と若狭塗 みけつくに 御食国若狭おばま

おばまひろみね  
小浜市小浜広峰 など

油の乗った鯖に一本づつ串を打ち香ばしく焼いた「浜焼き鯖」は小浜名物のひとつだ。焼きたてはもちろん、冷めてもおいしく食べられる。鯖を焼く煙が御食国と呼ばれた小浜の誇りを物語っているようだ。



浜焼き鯖<sup>①</sup>



鯖街道の起点 いづみ町商店街<sup>②</sup>



豊富な海産物が水揚げされる小浜漁港<sup>③</sup>

若狭は古来、朝廷に海産物を納める「御食国」と呼ばれ、特に小浜は豊富な海産物が水揚げされる食文化の発達した都市です。

このため、鯖街道（特に塩漬けした鯖は京につくところには食べごろとなっていたことから名づけられた）の起点である「いづみ町」での焼き鯖、小浜漁港での水揚げ、西津地区での若狭かれいの天日干し、南川でのいさざ漁（白魚をいさざと呼ぶ）など、食文化に根ざした風景があらこちらで見られます。



若狭かれいの天日干し<sup>④</sup>



いさざ漁<sup>⑤</sup>

わかさぬり  
若狭塗は約400年前に小浜藩の漆職人が中国漆器をヒントに貝殻などをちりばめ、海底を表現したことが始まりといわれています。

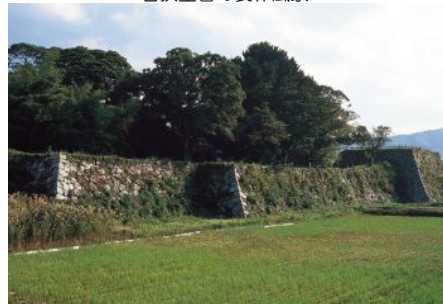
さかいただかつ  
小浜藩主の酒井忠勝は、これを「若狭塗」と名付け、足軽たちの内職として生産を勧めたため、若狭を中心に広く普及、発展してきました。若狭塗の技法を用いて製作される若狭塗箸は全国の8割の生産量を誇っており、その美しさから、県外の観光客や外国人旅行者にも喜ばれています。



若狭塗箸



わかさぬりばし  
若狭塗箸の製作風景



小浜城跡（県史跡）







# 茶屋町の情緒漂う紅殻格子 三丁町

おばあすか  
小浜市小浜飛鳥 など

三丁町を歩くと、北前船の寄港地として栄えた当時の面影と風雅の香りが漂ってくる。近くには浅井三姉妹の次女「お初」が眠る常高寺…。しばし、時が経つのを忘れる。



おばあすかにくみ  
小浜西組重要伝統的建造物群保存地区の一角 三丁町



ほしゅまつり  
放生祭 (県民俗文化財) ①



地区住民による一門一灯運動②

おばあすかにくみ  
小浜市小浜西組地区は重要伝統的建造物群保存地区に選定され、丹後街道が東に折れ曲がる周辺を境にして、東に商家町、西に茶屋町、後瀬山麓および西端部には寺町が形成されています。茶屋町があったところは三丁町と呼ばれ、紅殻格子などを有した家並みが建ち並び、落ち着いた雰囲気を感じさせます。また、若狭地方最大の秋祭りである「放生祭」では、山車が練り歩き、歴史的な町並みと相まった風景が見られます。



じょうこうじ  
常高寺参道③



常高寺山門④

西組地区の西側には、常高寺があります。常高寺は浅井三姉妹の次女であるお初が、夫である京極高次の菩提を弔うため出家（出家後は常高院と呼ばれる）して、寛永7年(1630年)に創建したものです。常高院は1633年に死去、常高寺に葬られました。その墓所は常高寺の裏にある山を数十m進んだところに残されています。



常高院墓所⑤

